

思いをもちイメージを膨らませて表現する図画工作科の授業デザイン

—製作のプロセスに着目した授業実践—

渡邊 ゆかり（教育実践コース）

1 問題と目的

図画工作科は造形活動を通して発想や構想をもとに、試行錯誤をしながら自己決定を繰り返し自分の思いを表現する教科である。同時に共同製作や鑑賞などによって他者理解が行われる教科でもある。しかし教育現場で行われている図画工作科の授業では、描きたいものやつくりたいものが思い浮かばず手が止まっている子どもや、「何色を塗ったらいいですか」と教師に聞く子ども、すぐに「できた」と言い製作を止めてしまい、試行錯誤をするなどの意欲が継続しない子どもの姿が見られる。子どもがこのような姿になる原因は、対象への思いをもつことができないまま製作に入っていることや、どのように表すかイメージをもつことができないことが一因ではないかと考えた。

本研究では、子どもが本来備えている資質・能力を発揮し、つくりだす喜びを味わい、身の回りの形や色と豊かに関わる資質・能力を一層高める授業を目指す。子どもが自分の思いをもち、イメージを膨らませるにはどのような要件が必要なのかを明らかにし、子どもの本来の力を存分に発揮できる授業の実現を目的とした。

2 実践の概要

上記の目的のために以下の3実践を行った。

実践1「ちいき美術館」（2学年）

(1) 実践の意図

実践1では、子どもがイメージをもち、意欲的に表現するために、子どもが対象への思いをもつための関わりを意図的に設定する手立てに着目した。生活科との教科横断的な活動を構想し、地域と継続的に関わる中で子どもの日常生活に直結した題材を設定した。見学先に感謝の気持ち伝えるために作品をつくり、各店舗で展示することとした。生活の舞台である地域での活動を通して、子どもが店舗で働く人への思いをもてるようにした。

(2) 行った手立て

生活科の「まちたんけん」では、店の人との対話などの関わりや店についての調べ活動を丁寧に行った。子どもたちは興味がある店を訪問した。図画工作科では、クリスマスの時期に合わせて「お

店にプレゼントする絵をつくろう」という題材を設定した。この題材で子どもが思いをもちイメージを膨らませて表現するために3点の手立てを行った。1点目は、楽しみながら技能を習得できるようにすることである。2年生の発達段階で取り組みやすいステンシルの技法を扱った。2点目は、生活科と関連付けて「お店にお礼のプレゼントをあげたい」という気持ちを高めたことである。店の人に喜んでもらえるような作品をつくりたいという思いが、店のイメージに合う形や色を工夫することにつながった。3点目は、一緒に訪問したグループごとに版画を製作したことである。友達とイメージを出し合い、どのような絵にするか話し合いながら製作を行った。

(3) 結果と考察

実践前に子ども46人にとったアンケートでは、「描きたいものがすぐうかぶか」という項目について「すぐうかぶ14人」「まあまあ浮かぶ22人」「あまりうかばない6人」「うかばない0人」「無回答4人」であった。実践後のアンケートでは「描きたいものを考えることができたか」について「できた27人」「まあまあできた13人」「あまりできなかった1人」「できなかった0人」,「無回答5人」であった。実践前に「あまりうかばない」と答えた子ども6人のうち5人が「できた」「まあまあできた」という肯定的評価に変容した。この要因として、生活科でグループごとに店を訪問したことや調べ学習、まとめの活動に取り組んだことで店や店の人への思いをもつことができたこと、イメージをもちどんなふうに表示したいかなどを友達と共有できたことが考えられる。

(4) 成果

この実践の成果は、次の3点である。1点目は、子どもたちが見学した店や店の人に対して思いやイメージをもつことができたことである。2点目は一次で技能習得を行ったことでどの子も基本的な技能を身に付け、自由に扱えるようになったことである。3点目は共同製作を行ったことで、友達との対話が生まれ、店への思いやイメージをもつことをできない子どもが友達との関わりの中で思いやイメージをもつ過程を共有し、学ぶことがで

きたことである。共同製作に取り組んだことがない子どもたちであったが、友達と一緒に生活科の活動を経験したことによって、「お店の人に喜んでもらいたい」という共通の目的が生まれ、仲間と協働して一つの作品を作ることができた。子どもたちがこの経験によって友達の思いやイメージを理解し、互いにに関わり合いながら一つの作品をつくる楽しさや喜びを学んだことも成果であった。そしてこの共同製作においては他者の行為を見ながら自己の表現に生かすということが行われたが、これは表現と鑑賞が一体となって繰り返し行われることを意味する。共同製作は子どもが友達と共に対象への思いを強め、イメージをさらに膨らませることに有効であると考えた。

(5) 課題

共同製作であったために一人一人の見取りが十分にできなかった。「思い」をもち、「イメージ」を膨らませて表現するとは、子ども一人一人の中でどのようなことが起きているのかを見取り、この過程の構造を明らかにしなくては、「思い」がもてず「イメージ」が膨らまない子どもへの手立てとして有効なものを示すことができないという課題が残った。

実践2 E駅地下道壁画製作

(1) 実践2の意図

実践2では、担任する5学年全体で、総合的な学習の時間と関連付けた題材に取り組んだ。前回の課題をふまえて、次の点に留意した。

筆者を含む5学年の担任2人で話し合い、総合的な学習の時間、図画工作科におけるねらい、資質・能力を明確にした。ビデオ撮影によって子ども同士の対話や関わり、つぶやき、行為を記録した。子どもの発話や行為の解釈について大学教員と協議して蓄積した。図画工作科の終末の鑑賞において記述した子どもの振り返りの記述の解釈についても筆者と大学教員2名、合計3名で協議し、妥当性をもてるようにした。

(2) 行った手立て

本実践における主な手立ては3点ある。1点目は総合的な学習の時間と関連させたことである。4月に5年生の子どもたちに「総合的な学習の時間で、改めて自分の地域を見つめ、地域の良さを誇りに思うとともに、さらに素晴らしい地域になるように、もし課題があるならば自分たちの力で課題を解決しよう」と投げかけた。そこで子どもたちはフィールドワークを行い、通勤、通学で多くの人が利用するE駅を発見すると同時に、駅の地下

通路を通った時に暗く感じたり、「通ると怖い感じがする」という地域の人の話を聞いたりした。この地下通路の状態を課題と捉え、環境改善の方策として清掃活動及び地下通路に壁画を描くことに取り組むことにした。2点目は友達や地域の人との継続的な関わりを組み込んだことである。地域や駅の歴史を学ぶ活動や、地域に残る絵としてふさわしいデザインを考える活動や、現地での5日間の製作活動を設定した。共に作る友達や地域の人との対話が自然と生まれた。3点目はメタ認知のための鑑賞活動の設定である。一人一人がどのように壁画に関わったのかを振り返り、思いをこめて付箋紙に書いて壁画のポスターに貼った。付箋紙に可視化したことで一緒に製作した友達の思いやイメージ、表現の工夫について知り、ここでも自然に対話が生まれた。

(3) 結果と考察

題材の終末に行った鑑賞の授業で子どもが振り返りとして付箋に書いた記述文を基に、すべての記述を「思いに関すること」「イメージに関すること」「意図的な表現に関すること」「偶然生じた表現に関すること」「自他の行為に関すること」「感想に関すること」の6種類に分類をした。分類ごとにテキストマイニングにかけた結果「思いに関すること」についてはスコア順の上位が「地下道」、出現頻度の上位が「明るく」「ほしい」であった。この結果から「地下道を明るくしたい」「地下道を通る人に明るい気持ちになってほしい」という思いがあったと推察される。「イメージに関すること」の結果はスコア順では「けむり」「車輪」「汽車」など具体物が目立った。また「にじいろ」「ピンク色」など色に関する言葉も見られた。出現頻度では「色」「かく」「イメージ」などが上位であった。このことから具体的に絵を描いていくための構成や形や色の関係性を読み取ることができる。「表現」ではスコア順では「ぬる」「ぬりにくい」「すきま」「できる」など、出現頻度順では「グラデーション」が特徴的であった。このことから、大きな凹凸のある壁面に塗る作業に苦戦しながらも試行錯誤しながら技法を駆使していたことが読み取れる。「自他の行為」では、人との関わりに関する記述が多くみられ「感想」では「がんばった」「うれしかった」「よかった」などの情意面に関する記述が多くみられた。このことから、友達や地域の人など他者と関わりながら製作したことで満足感をもったことが推察される。

(4) 成果

この実践の成果は以下の3点である。1点目は

学年児童全員で取り組むことで全員が思いをもちイメージを共有し表現することができたことである。総合的な学習の時間と図画工作科の活動を学年全体で進めたことで、全員が思いをもちイメージを話し合い、互いの思いやイメージを融合させて下絵を完成させた。2点目は他者との継続的な関わりを意図的に組み込むことで思いを強めイメージの深まりや更新が常に行われたことである。子どもたちは製作意欲を高めるとともに持続することができた。3点目は鑑賞活動によって自分の行為を振り返りメタ認知できたことである。完成後に改めて一人一人が「思い」を込めて製作したことを振り返った。この活動を通して、子どもたちは自分には強い思いがあり、それが原動力となり表現に向かったことを自覚することができた。自己の行為を振り返ることができた点でメタ認知が機能していたと言えることができる。

(5) 課題

実践2によって製作には「思いをもつ」「イメージを膨らませる」「表現する」という3段階があることが整理できた。しかし本研究の課題意識は個人製作において思いやイメージをもつことができず表現活動に難しさを感じている子どもへの手立てを考えることであった。共同製作で友達と経験したプロセスを個人製作でも生かす実践が課題として残った。

実践3 いつでもあのときにタイムスリップできるわたしの絵

(1) 実践3の意図

実践3では、実践1、2をふまえて、子ども一人一人が思いをもち製作における3つの段階を生かしながら表現することを検証した。

(2) 行った手だて

本実践における主な手立ては以下の3点である。

1点目は一人一人が思いをもてるように総合的な学習の時間や特別活動と関連させたことである。製作は個人で行うが、共通の経験をすることで思いを友達と語れるようにした。タブレットのロイロノートのシンキングツールにある「フィッシュボーン」を活用し、表したい思いとイメージを言語化・視覚化することを行った(写真1)。

2点目はタブレットによるポートフォリオの作成である。毎時間の終わりに作品写真に撮り、「今日思いを込めて工夫したことと次回取り組みたいこと」について記述したものを、教師のタブレットに提出するようにした。この手立てにより、自分が

毎時間行った工夫を写真共に蓄積していくことができた(写真2)。

3点目は相互鑑賞の設定である。ロイロノートの共有ノートの機能を活用し、互いの作品を丁寧に見て作者が込めた思いを想像してタブレット内でカードに記入をして送り合った(写真3)。タブレットによる鑑賞は見たい部分を拡大し思いを表すための工夫を見つけるために丁寧にみることに有効であった。

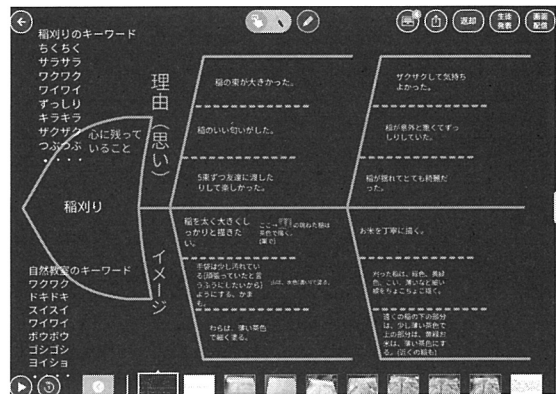


写真1 思いやイメージの言語化・視覚化

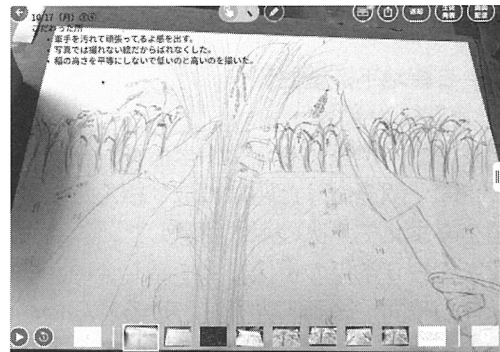


写真2 タブレットによるポートフォリオの作成

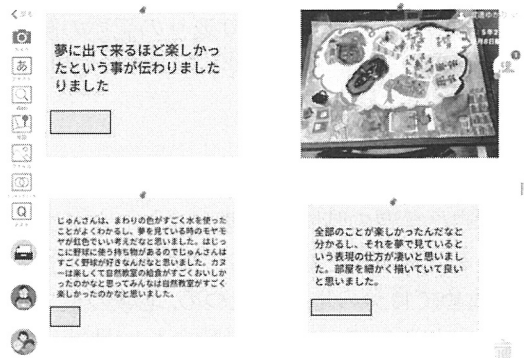


写真3 タブレットによる相互鑑賞

(3) 結果と考察

抽出児の発話をメモした記録や抽出児が記述したものや毎回の表現の変容から、製作における3段階が行われており、抽出児がどのように考えて行った表現であるのかを知ることができた。思いをもつために経験をしたことを言語化・視覚化したことにより表したい思いやイメージが明確になっている様子が見取れた。また毎回の表現の変化やそこに書き込んだ記述から抽出児が思いを表すためにイメージしたことを試行錯誤しながら表現している様子を見取ることができた。

(4) 成果

製作における3段階は共同製作だけでなく個人製作においても生かされることが確認できた。この3段階を踏む題材の指導計画を立て、各段階で手立てを行うことが必要であることが分かった。タブレットに蓄積したポートフォリオによって自分の製作のプロセスを振り返ることができることと同様に、相互鑑賞では友達の製作のプロセスを遡ることで友達の思いを想像して伝える鑑賞を行うことができた。

(5) 課題

本実践は絵画であり、立体ではまだ製作における3段階を確認していない。また、実践2と実践3は第5学年で行った。題材や学年間の汎用性を明らかにしていく必要がある。

4 実践の総括と今後の展望

(1) 図画工作科における「思い」と「イメージ」

当初、「思い」とは、「対象に対する感動や愛着などによって沸き起こる、つくりたくてしかたがないという気持ち」と考えていた。しかし、実践を通じて「思い」を広くとらえるようになった。発達段階によって「思い」が複雑化や深化することを見取ったからである。2年生では「お店の人を喜ばせてあげたい」という純粋で直接的な願いであったが、5年生では「他者に対する感謝」「課題を解決したいという願い」「他者の思いを取り込んだ上での自分の思い」などより複雑で深いものとなっていることが分かった。5年生の実践3では「楽しかった思い出」や「きれいだと感じたこと」など感覚的な思いで製作に入っていた。「イメージ」についても、最初は「こんな風につくりたいという、形や色の構成」と考えていたが、現在は「学習指導要領（平成29年告示）解説図画工作編」にあるように「心の中につくりだす像や全体的な感じ、又は、心に思い浮かべる情景や姿などのこと」と捉えるようになった。「イメージ」は、

子どもの内面に生じる形、色、配置などを伴った具体的なものと整理するに至った。

(2) 「思い」「イメージ」の表現行為との関係

研究を始めた当初は、題材への思いをもち、イメージを膨らませて表現する授業を目指していた。しかし、思いとイメージの順序性などの関係についての捉えは不確実であった。実践を重ねていく中で、生活科や総合的な学習の時間などに関連した活動において「ひとものこと」と関わることを通して対象への思いをもち、深め、強くし、表したい気持ちが生まれ、どんな形、色、感じに表すかというイメージを内面に描くことではないかと考えるようになった。よって順序性についてはまず「思い」をもち、次に「イメージ」を膨らませるのであり、この過程は製作の間、繰り返されるものであるとの考えに至った。またイメージは製作の過程で変容が常に行われることも子どもの姿から見ることでできた。

(3) 「思い」「イメージ」の関係に対応した教師の働きかけ

他者との思いやイメージの交流・共有は自己の表現を深めたり更新したりしていくために重要である。そのために互いがどのような思いやイメージをもったのかを対話したり、自分の行為や内面をメタ認知したりする場の設定が不可欠である。授業の振り返り活動や、鑑賞と関連させながら、自分の行為や内面を振り返り言語化する場を製作過程の途中や最後に設定し、その過程を遡って考えることで、表現に至るまでに自分が通ったプロセスを子ども自身が振り返り、学び直すのである。子どもがこの学びを継続し次回の製作に生かせるようにしたいと考えた。

(4) 今後の展望

本研究によって子どもが製作するときには「思い」「イメージ」「表現」の3つの段階があることを整理できた。授業者はこの段階で必要な手立てを行っていく必要がある。手立ては題材や子どもの実態によって変えていく必要があるため今後も実践を積み重ねていく。さらに表現と鑑賞の関連について引き続き研究を行い製作後だけでなく製作中での鑑賞が表現にとって有効な手立てであることも明らかにして、意図的に鑑賞を行うことの利点について提案していきたい。

引用文献

文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説図画工作編』日本文教出版、2018年、p. 10